

## 環境と人間と文学

### ～ケルトと出雲を繋ぐ八雲文学の一考察～

吉津成久

In the middle of the 21st century, in 2050, our earth is predicted to face a serious crisis because we shall run short of water by 75 percent that year. At present many scholars of authority in the world of environmental problems are formulating their theory that the way of overcoming the crisis of the earth is found in learning from the traditional ways of living of two tribes, the Celts and the Japanese, especially the Izumo tribes. The ways of these tribes have been inherited from ancient times. In the course of history these two tribes often suffered severe defeats. For instance, the Celts from whom European civilization had its origin were driven away from the central parts of Europe to the western fringes by the Romans and the Germans. Likewise the Izumo tribes of Japan, the torch bearers of the native culture of Japan, represented by Oh-kuni-nushi-no-Mikoto, were compelled to hand their territory over to the Yamato Imperial Court (the Yamato-Chohte). However, these two tribes are said to hold the key to the solutions of the question about the collapse of the earth. This paper explores this key and discusses the literature of Yakumo Koizumi, that is, Lafcadio Hearn, in his relationship with both the Celts and the Izumos.

キーワード： ケルト 縄文 出雲 循環 八雲

#### 1. はじめに

21世紀の中頃、2050年には、地球全体の75パーセントが水不足となる「地球危機」を迎えると言われている。<sup>1</sup> そして、この危機を救うのは、地球上の西端と東端に暮らす民族が古来発展させてきた二つの文明、ケルト文明と日本文明であるとされる。ローマ人やゲルマン人にヨーロッパ中央部から西の淵に追いやられた欧州文

化源流の担い手ケルト族の心と、日本文化のルーツである縄文人の心を受け継ぎながら大和朝廷に追いやられて国譲りを余儀なくされた出雲族の心が今注目されている。ケルト族と出雲族のこの世での歩みは、『赤毛のアン』の翻訳者で出雲出身の松本侑子によれば、いわば「敗北の物語」である。<sup>2</sup> しかしながら、この両者および縄文人の心には「自然との共生」が底流に存在する。近年ヨーロッパでは、「ケルト文化への関心が高まっており、その延長線上で、縄文に熱い視線が注がれている。フランスやイギリスに続き、2004年にはドイツで縄文を紹介する展示会が催され、火焰土器などの造形にとどまらず、それを生み出した世界観がケルト文化への強い郷愁につながってゆくのを直感しているかのように思われ、いかにも近代がもたらした合理主義の行き詰まりと表裏をなし、自然との共存共生を機軸にして強烈な個性を主張する縄文が視線を集めている」。<sup>3</sup> そこで、「地球危機」に直面している現在、どんな文明が滅び、生き残っているのはどんな価値観の文明だったのかを過去から学ぶことが急務である。<sup>4</sup> 本稿は、自然と人間の絆の重要性をめぐって、マヤ (Maya) 文明の崩壊から学ぶことは何かを論じ、地球危機を救うといわれる古代からのケルト文明と日本文明に共通する価値観を論じ、この二つを結びつけたケルトの末裔、アイルランド出身のラフカディオ・ハーン、すなわち小泉八雲が書き残した紀行文学『日本瞥見記』(*Glimpses of Unfamiliar Japan*, 1894) について論考するものである。八雲は、特に出雲から島根、鳥取の日本海沿岸に色濃く残る古代日本人の宇宙観、自然観、人間観とアイルランドやスコットランド他に残るケルト民族のそれらとの共通性を発見したと考えられる。また、八雲は松江に来たとき、直感的に自分の民族ケルトの追いやられた歴史との共通性を既に感じ取っていたはずである。

## 2. 「分断」から「絆」へ ～ 自然への畏敬とオノマトペ表現

### 2.1 「分断」から「絆」へ ～ 自然への畏敬

戦争の現実と真実を伝える報道写真ドキュメント『破壊される大地』(岩波書店 2003年初版)の著者でフォトジャーナリストの桃井和馬は、キリスト教月刊誌「こころの友」の中で、混乱する現代世相を表現するキーワードとして「分断」を挙げている。第一に、イスラム社会とそれ以外の社会の分断とそれに代表される民族間の分断、第二に、格差が広がるばかりの富裕層と貧困層の分断、第三に、家族や地域内の人間関係の分断、第四に、「知」の分断として、専門分野の細分化による異なるテーマの内容理解ができない研究者の増加、最後に、人間社会と自然界の分断が挙げられている。人間による自然破壊が人間に猛省を促す最高の実例として、熱帯雨林やサバ

ンナがいかに大きな自然の繋がりの中で成立しているかを示している。「アカシア科の木は、空気中から摂った栄養を根を通して他の植物に分け与え、シロアリは枯れた木々を食糧にすることで森をきれいにし、また大きな塚を作ることで、地中に空気を流し入れるそうです。そして、象は食べた植物を完全に消化しないまま糞にすることで植物の種を広範囲にまき、ハイエナは腐肉の骨まで食べることでサバンナが病原体の住処にならないようにします。それぞれの動植物だけを見ていけば、違いばかりが目立ちますが、全体から見れば、すべてがすべてを必要とする、大きな絆の中で成立しているのです」。<sup>5</sup> 桃井は結論として、物事を点だけで見のではなく、大きなつながりの中から見せること、「分断」ではなく「絆」のある世界こそが今求められている、と述べている。

## 2.2 宮沢賢治のオノマトペ表現

16世紀、日本は戦国時代に入り、地方大名による利便性の高い平野部での城下町建設に伴い、日本人は「山の人」から「野の人」へと変わった。用土木技術の発展がこの変化を支え、平野での稲作を可能にした。それ以前の日本人は、山裾の狭い窪地の「天水田」に頼り、森が生み出す植物やそれが育む動物や鳥の肉の恩恵にあずかっていた。そこから森の中の自然が生み出す個々の存在に魂の力を信ずるアニミズム信仰が生まれ、自然との畏敬に満ちた魂の直接的交流は、文学におけるオノマトペ (onomatopoeia)、すなわち「擬音語」、「擬声語」および「擬態音」表現の豊かさを生み出した。日本文学の中でも、特に宮沢賢治の作品は、このオノマトペ表現が豊かである。例えば、「どんぐりと山猫」という一篇では、「かねた一郎」という主人公が、山猫からの葉書による催促で、ある奇妙な裁判の判事として出かけることになる。どんぐり達がめいめい自分が一番偉いと主張して収拾がつかないので一郎に審判を下してほしいというわけである。一郎は「それなら、こう言い渡したらいいでしょう。この中で一番馬鹿で、めちゃくちゃで、まるでなっていないようなのが一番えらいとね」。この判定を聞くと、どんぐり達はしーんとなって、かしくまってしまう。山猫は別れしなに「これからは名誉判事になっていただき、葉書が行ったらまた来てください」というが、その後葉書は来なかった。この作品のオノマトペ表現を一部紹介する。一郎が、山猫がさしむけた馬車に乗って到着した場面 — 「(山猫が煙草を吸うため) マッチをしゅつと擦って、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別当は、気を付けの姿勢で、しゃんと立って見たが、いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。そのとき、

一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるやうな音をきゝました。びっくりして屈んで見ますと、草の中に、あっちにもこっちにも、黄金いろの円いものが、ぴかぴかひかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないやうでした。わあわあわあわあ、みんななにか云っているのです。……（山猫が馬車別当に裁判の庭を作るため草を刈らせる）馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌をとりだし、ぎっくぎっくとやまねこの前のとこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかって飛び出して、わあわあわあわあ言ひました。馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんがらんと振りました。音はかやの森にがらんがらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこししずかになりました。……

別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゅうばちっ、ひゅう、ばちっと鳴らしました。空が青くすみわたり、どんぐりはぴかぴかしてじつにきれいでした」。<sup>6</sup>（傍点は筆者による）

### 2.3 小泉八雲のオノマトペア表現

小泉八雲 (Lafcadio Hearn, 1850-1904) は、旧制松江中学英語教師として赴任するに際し、明治23年(1890年)8月30日下市あるいは米子から人力車と汽船を乗り継ぎ、彼が *The Chief City of the Gods* (神々の国の首都) と呼んだ松江に到着する。到着後しばらくは市街地のほぼ中央に位置し、松江市を南北に分ける大橋川にかかる「松江大橋」の北岸にある富田屋旅館(現在の「大橋館」)に約二ヶ月間滞在する。八雲が「神々の国の首都」(*Glimpses of Unfamiliar Japan* すなわち『日本瞥見記』の第七章)の冒頭で、最初の宿泊先である富田屋旅館の寝床の中で聞いた早朝の松江の描写をしているが、それは、まさにオノマトペア表現である。まずは、枕につけた耳の下に「ドキンドキン」と大きく、ゆっくりと波打って聞こえる心臓の脈拍に似た音である。それは米を搗く太い杵の音で、丸裸の米搗き男が柄の端を踏むと杵が上がり、足を離すと杵が臼の中に落ちる。その「ドスン」と落ちる音が一定の拍子を持って響いてくる。八雲はその音を「日本国の脈拍の音だ」と言う。次に洞光寺という禅寺の大きな釣鐘の音が「ゴーン、ゴーン」と鳴り響く。つづいて材木町にある小さな地藏堂から朝の勤行を告げる寂しい太鼓の音が「ドン、ドン、ドドーン」と聞こえだす。やがて、早出の振り売り八百屋の「ダイコやい! カブや、カブ!」という呼び声、それから、炭をおこす焚きつけの木を売りに来る女の哀れっぽい声「モヤヤ、モヤヤ!」が聞こえる。さらに八雲は松江大橋を渡る下駄の音を「どうしても忘れられぬ

音だ。このカラカラと大橋を渡る下駄の音は、早くて、陽気で、調子よく、まるで大舞踏会の足音だ」と捉えている。このように、八雲は次第に活気づいていく松江の朝の光景を、まだ床に身を置きながら聴覚を駆使した表現で綴っている。<sup>7</sup> 八雲のひ孫小泉 凡は次のように言っている。「ハーンは、音をはじめ、香り、笑いなど感覚的、情緒的な問題に関心を示し、以後の著作にも度々それについての言及がある。これは単に文学的表現の効果を高めるだけでなく、彼が民俗学徒（フォークロリスト）として、感覚の民俗とでもいうべき問題を扱っている点にも私など大きな興味がある」。<sup>8</sup> 日本民族とケルト民族は本来「森の民」で、自然との共生を重んじ、自然から生み出される「永遠の循環」の恩恵を感謝し、畏敬の念を持ち続けてきた。ケルトの血をひく小泉八雲は、オノマトペ表現を通して日本古来の自然信仰に強い共感を抱いたといえる。

### 3. 直線的歴史観と時間意識 vs. 曲線的（円環的、螺旋的、循環的）歴史観と時間意識

#### 3.1 ギリシャ・ローマ対ケルト

フランスの文化人類学者レヴィ・ストロースが言っている。「世界の文明・文化というのは二通りある。一つは、物事を直線的に考えていく。前へ前へと。そういう時間の意識を持った文化・文明はギリシャ・ローマ型である。そして、それは近代以降のイギリス、アメリカへと繋がっていく。一方、それに対して、螺旋的な、あるいは循環的な時間意識を持った文化・文明がある。それはケルト型である」。日本は、19世紀中頃の開国以来、あるいは戦後（1945年以降）においてずっと欧米文化を見習い、キャッチ・アップするということで、非常に優等生的にやってきた。福沢諭吉のいう「入欧脱亜」の精神で頑張ってきた。日本は古来循環的な時間意識を伝統的に持っていた。しかし近代に入ると、とにかく欧米の植民地や属国にならないため、直線的な時間意識でここ百五十年くらい頑張ってきた。しかし、もう二十一世紀に入ったら、その一本やりの真っ直ぐな時間意識や生き方ではにっちもさっちもいなくなっている。そこで、今こそケルト的な時間意識、そして日本文化が基層に持っていたような螺旋的なもの、あるいは円環的な時間意識をわれわれの暮らしの中に、生活意識や想念の中に入れ込む必要がある。<sup>9</sup>

#### 3.2 ケルトの時間意識は「循環的」～「再生」の周期（サイクル）

ケルトの時間意識によれば、「生」は「死」で終わるのではなく、「生、死、再生」

という周期（サイクル）が時間として存在する。死は冬で、北方の国では、特に冬には生命が見えなくなってしまうが、生がしぼんで死に至るのではなくて、春になると再生する。

アイルランド人の先祖ケルト民族の暦では、11月1日が一年の始まり、つまり新年で、その前日の10月31日は大晦日にあたる「ハロウィーン」。11月1日から1月31日までは「サマイン」。この「ハロウィーン」から「サマイン」の終わりまでの時期、現世と異界の垣根が大きく取り払われ、先祖の霊が現世のかつての我が家に温もりに帰り、悪魔や妖精たちも異界から解き放たれるので、それを慰撫したり、追放したりする必要があるといわれる。つまり、この時期は日本のお盆の時期にあたる。クリスマスはこの期間にあたり、あのサンタ・クロースの原型は深いところでは「死者の訪れ」というテーマと結びついている。今のクリスマスの一つ前の原型では、プレゼントを持ったサンタ老人がクリスマスイヴの夜を歩き回るのではなく、子供たち自身が死者の代わりとなって、死者をもてなすライス・プディングを貰い歩いていた。この習俗は19世紀までヨーロッパ各地に残っていたが、今やこの異教的なものが息づいているところはアイルランドだけである。かつての子供たちはただプレゼントを待っている存在ではなく、「プレゼント（プディング）をくれない家には不幸を与えるぞ」という意味の「トリック・オア・トリート」(Trick or treat.)と言って脅すことも出来たわけだから、子供は死者に近い存在として力を持つことができたのである。この風習はハロウィーンの祭りの中に生き残っている。死者＝子供という観念は、死者が訪れてすべてが終わりに近づいていく瞬間（11月1日）がすべての始まりだという、死を起点にして生まれ変わっていくという民族の考え方に由来している。冬＝死＝闇の季節を一年のサイクルの始まりに置き、次に春＝生＝光の到来を祝う二月一日の「イムボルク」、夏の始まりである五月一日の「ベルティネ」、秋の訪れを祝う八月一日の「ルークナサド」へと続く。それぞれケルトの女神の名がつけられた。四季の始まりを祝うケルト暦の祝日である。このサイクルから、肉体が滅んでもそれから魂が蘇生するというケルト民族の死生観がうかがえると同時に、彼らが此岸よりも彼岸との霊的交感を重んじ、そこから生まれる原始的想像力を文化・芸術創造の活力源としたことがうかがえる。

映画『イン・アメリカ～三つの小さな願いごと』（2003年）。ニューヨークにアイルランドから一家が移住する。売れない俳優のジョニーと妻サラ。幼い姉妹のクリスティとアリエール。移住してきた理由は、一人息子フランキーが二歳で死に、その悲しみを乗り越えるためであった。クリスティとアリエールは、故郷アイルランドで

のハロウィーンのお祭りをここニューヨークのぼろアパートで二人だけで祝う。「トリック・オア・トリート」と言って、アパートの一軒一軒を訪れてドアをたたくが誰も応じてくれない。たった一人、「叫ぶ男」と呼ばれる黒人のマテオだけは心を通わせてくれる。彼は HIV（エイズ）にかかっている余命いくばくもない。やがて夫婦の間にフランキーの成り代わりともいえる男の子が生まれる。しかし彼らに出産費用を工面する余裕が無い。ところがマテオが死に際して書き残した遺言から、マテオが全財産を夫婦に譲ることが判明する。マテオの死と入れ替わるようにフランキーの代わりともいえる息子が誕生したわけである。アイルランド系アメリカ人監督のジム・シェリダンは、これは自分の生い立ちを映画化したものだと言った。まさに、ケルト伝統の「サイクル」観念がこの映画にも現われている。

### 3.3 ケルトの円環的、循環的空間意識 ～ 日本との共通点

時間意識だけでなく、空間意識においてもケルトは円環的、循環的といえる。例えば、歴史記念物として遺されているケルトの家屋は、草葺で円形である。人々が話し合う時にも車座になる。日本の縄文文化でも、人々の集りは円の形で囲む。あるいは家は出来るだけサークルのような感じで建てる。また、世界各地で、聖地と呼ばれる場所には、必ずと言っていいほど人間によって崇められ信仰されている石や岩、あるいは巨石による古墳などがある。そうした聖なる石に出会うと、非日常的な感覚に導かれることがある。また、石は沈黙して語らない、と一般的に多くの人は思っているが、古代の祝詞（のりと）の中で、森羅万象の岩、樹木、草などすべてのものが「ざわめく」のをやめないとされている。日本では古来、石はこの世とあの世をつなぎ、物と霊をつなぐ回路であった。ちょうど、アイルランドの巨石古墳や砦などに異界への入口があるように。そして、ケルト圏と日本における円環的、循環的空間意識を形で示すものが、いわゆる環状列石で、イギリスやアイルランドに今も残る「ストーンサークル」や「ドルメン」や「ストーンヘンジ」および日本の秋田県鹿角市十和田大湯にある野中堂遺跡、万座遺跡という非常によく似た形式を持つ二つの環状列石、いわゆる「大湯ストーンサークル」である。アイルランドの首都ダブリン北方、ボイン川流域にある四十もの巨石古墳のうち最も有名なのが五千年以上前に建造された「ニューグレンジ」(Newgrange, ケルトの言葉ゲール語で「太陽の家」の意)である。何のために造られたかは今なお謎であるが、「太陽信仰の神殿説」「太陽や月の運行を調べる天文台説」「墓地説」などに分かれている。大湯のストーンサークルは、築成年代は約四千年から三千五百年前の縄文時代後期といわれ、考古学者によって「墓地説」と「祭

祀場説」に分かれている。いずれにせよ、日本とケルト共通に、これら石による建造物は、星や天体の動きや記憶を伝承し、宇宙や異界との交信を行うためのもので、これら東洋と西洋に存在する「聖なる石」を見ると、それぞれ形状は違っていても、信仰において共通した役割があったように見える。

八雲は、「日本の庭」(In a Japanese Garden, 『日本瞥見記』、第16章)の中で、日本の庭における「石」、といっても「自然石」の美しさを理解することの重要性を強調している。さらに「石」に性格があること、また「石」に色調と明暗があること、そして、個性とか相貌とかいうものを「石」が暗示していること等を述べている。さらに、先に触れた日本とケルトに共通する「聖なる石」の観念を示すように、日本のほとんどどこの地方に行っても見られる「霊石」とか「化け石」とか「霊験の力のある石」などについてふれている。<sup>10</sup>

#### 4. 水と土の循環 ～ マヤ文明、ケルト文明そして日本文明

テレビ番組「地球新世紀・第二話 ～ 水と土の循環」および「地球新世紀・第三話 ～ 日本再発見」(2007年2月24日および3月3日 BS-TBS 放送)より。

##### 4.1 マヤ (Maya) 文明は何故滅んだか？

これに地球を救う鍵がある。マヤ文明は中央アメリカのユカタン半島からグアテマラ・ホンジュラスにかけて栄えた高度な都市文明である。巨大なピラミッドや神殿を中心に、すぐれた暦法、数学、絵文字、石彫りなどを特色としていた。AD300年から900年ごろに最盛期を迎え、1200頃から衰退し、かつては6万人の巨大都市であったが19世紀には廃墟となった。王の一番の願いは「命の水」を支配することであった。一滴の水も漏らさぬため水路を漆喰で塗りつぶした。実は、王が水を自由に操ろうとしたのが衰退の原因であった。文明の繁栄とともに人口が増加し、そのため森林を伐採し農地の拡大を図った。土地を休ませる時間が無いため、命を育てない土を生み、森は枯渇していく。それは自然の「循環」からの離脱であった。当時の王侯たちの歯を調べると異常が見つかった。骨膜炎にかかった跡があり、病原菌が蔓延していたことが判明した。さらに、湖底の堆積物から得られる「年縞」(ねんこう)という水平の縞模様を調べると状況はきわめて深刻であったことが判明した。「年縞」とは、いわば土の年輪、地球のDNAといつてよい。神殿は、「雨の神」への雨乞いを実行する場所であり、それを唯一可能ならしめる王の権能を誇示する場所であったが、その建築は一層加速されていった。しかし、「雨の神」からは見放され続けた。森林伐

採と同時進行で行われたのが漆喰の製造であった。漆喰の原料は地中の石灰岩である。まず石灰岩を焼くのだが、そのために森の木が使われる。薪が早く燃えきってしまうため、森の木の伐採が加速する。焼かれた石灰岩は水によって溶解される。こうして出来上がった石灰を二ヶ月ねかせ、漆喰が出来る。そして神殿建設と水路の塗装に使われる。しかし漆喰の使用が気候の乾燥化を招いた。漆喰の色は白なので太陽光線を反射するから大地の温度が下がる。温度が下がると上昇気流ができない。したがって雲が出来ず、雨が降らない。マヤの王は水を支配するため「漆喰」を神殿やピラミッド建設そして水路に使用した。そのしっぺ返しがやってきたのである。現在のコンクリート建材による高層建築物やダムも悪い付けをもたらしているのではないか？

#### 4.2 日本における土と水の循環

地球を救うのはなんとしても水と土の循環である。熊野の山間にある古座川。河内様と呼ばれる浮島が河内神社のご神体である。毎年夏に古座川河内祭りが開かれる。川とともに暮らし、水と共に生きてきた民が感謝する祭りである。日本各地には、水への信仰が根付いている。水はあらゆる生命の源であり、その恩恵で人類は今日まで生きてきた。

奥山に降る雨。奥山は地下水を蓄えている緑のダムである。流れていく水、再び湧き出る水。それが沢から川へと注ぐ。山の養分を含んだ水は川に生きる生命体を育む。奥山から里山へ流れる水の恩恵を受けるのは人も同様である。流れ来る天然水を人が水田に水入れする。それは古代から続いてきた原風景である。土もまた水に育まれ、毎年大きな恵みを人にもたらす。水は蒸発して雲となり、雲は奥山に雨を降らせ、かくして人は水と土の循環による恩恵を受け続ける。

八甲田山をのぞむ青森県の田舎館村（いなかだてむら）。ここに二千年前の水田跡が発見された。弥生人の稲作の実態が分かる。山麓に畑、沖積水田。千年以上持続可能な稲作が営まれている。その秘密は「水と土の循環」。作物は人間ではなく土が作ってくれる。森が百年に1センチの腐葉土を作ってくれる。それを有機農業家の人が学んで十年から二十年で作る。ここは限りなく水と土が循環する世界である。

日本の飛騨高山にある「車田」（くるまだ）は、神様に奉納する米を作るいくつかの同心円からなる水田である。中心に神、周辺に水を送る。まさに、あのストーンヘンジやストーンサークルが表わす円環的、循環的空間意識を示している。

全長154メートルの北海道の釧路川は自然の生き物の宝庫である釧路湿原を生み出した。しかし、従来の蛇行して流れる川を物流のスピード化のため直線にしたため

に、「丹頂鶴」など貴重な生物が絶滅寸前の危機を迎えた。そのため再び蛇行する川に戻そうとする計画が出され、その一部は修正されたが、問題は完全に解決したわけではない。ギリシャ・ローマ型の直線的志向の失敗例である。

#### 4.3 ケルトの循環的意識

アイルランドのトリニティ大学図書館にある『ケルズの書』(*The Book of Kells*)は、千二百年以上前、西暦800年頃キリスト教に改宗したケルトの修道僧によって完成された子牛紙680ページにわたる聖書の四福音書の装飾写本である。聖書のラテン文字の周りを、また隙間を目くるめくようなケルト文様が色鮮やかに描かれている。彩色に用いられた絵の具の原料はすべて自然界から採取したもの。例えば、赤色には地中海産のカイガラムシの雌を乾燥して作った染料のケルメスを用い、群青色にはアフガニスタン産のラピスラズリ（瑠璃の一種）が用いられている。その貴重な完全復刻版（レプリカ）が梅光学院大学図書館にある。そこに描かれている動物文様や組紐文様や渦巻文様は、生命の無限循環を表わし、それはケルト人の宇宙観や死生観を示す。中でも一番重要なのは渦巻文様で、「水の循環思想」を表す。この渦巻文様は、日本の縄文土器や京都「法然院」の白砂に見られ、それは聖なる水の流れ、循環をしのばせ、人の心を和ませる。かつてケルト人が生活した今のフランスはガリア地方と呼ばれ（カエサルすなわちジュリアス・シーザーによる『ガリア戦記』に詳しい）、フランス第二の大河セーヌ川の水源地はブルゴールニュ地方にあり、ケルトの水の女神セクアナ（セーヌ川の語源）が祀られている。ケルト人は、循環する水の尊さを人々に教えるため、「水には病を癒す霊力がある」という宗教的言い伝えをのこした。特にアイルランドで今でも根強い聖泉信仰に通じる。この水源地一帯には二千年ほど前からケルトの四集落があり、セクアナ女神へ祈願する巡礼がひんぱんにあったといわれている。それでは、この泉信仰が何故渦巻文様と結びついたのか、それを解く鍵は、前述の「ニューグレンジ」にある。その入口の大石に三つ組の渦巻きが彫られている。それは、生一死一再生のサイクルを表わしており、恵みの循環を示している。ケルトの民は二千五百年前の森の住民で、国を作らず、部族ごとに住み、鉄器、金細工などを作製していた。彼らは木を神が宿るものとして大切にし、また、様々な循環を森の中に発見した。例えば、落ちたドングリをイノシシが食べ、その肉が人間を育む、といった循環の恵みを。『ケルズの書』の動物文様は、獐猛な動物も優しい動物も人間と共存共栄する存在としてその価値が認められていた証拠である。

やがてケルトの民は自然支配を尊重するローマ人に東から西に追われ、大西洋の淵

に住みついた。彼らは一神教である新しいキリスト教と従来彼らが信仰してきた多神教のドルイド教を共存させた。ケルトの民の生き方は、異質なものを一体にする「二項一体型」で、ローマ人の「二項対立型」と一線を画す。ケルト人が選んだ異質なものが互いに結び合う共存の道は、『ケルズの書』における組紐文様に象徴される。それはまた永遠の循環のシンボルである。アイルランドの最西端に位置するアラン諸島は岩盤が広がる荒蕪の島である。風が運んできた僅かばかりの砂埃と海浜の砂に栄養となるワカメを混ぜて岩盤上に撒いて土を作り、ジャガイモを植える。恵みの循環の基本である土をこうして何千年にもわたって作ってきたのである。

#### 4.4 京都の「茶の文化」が「環境問題」を解決する

千玄室（83歳）は第十五代裏千家家元である。茶碗の中のグリーンは自然そのものを表わす。茶室は地球を構成する木、火、水、土、金など地球上の全ての要素を持っている。一碗のお茶をあらわす言葉として、元祖千利休は「和敬清寂」（わけいせいじゃく）という言葉を書き残した。「和敬」は「心の融和、すべて平等」をあらわし、「清寂」は「心の清らかさと動じない心」をあらわす。茶道の精神をもっとも表わすものは「躡口」（にじりぐち）。傾頭しなければ入れない。ましてや武器等持っている者はいれない。茶碗の前で人間は皆平等である。「人と人、人と自然の間を分け隔てる境界線はない」。この茶の湯の精神は、アイルランド南西、ケリー洲沖に浮かぶ「スケリグ・ヴィヒール」にあって、修業に励んだ修道僧たちの精神にも通じる。彼らは西の海に永遠の世界があるというケルト伝来の理念から、この絶海の孤島を苛酷な修業と聖書の筆写と祈りの場として選んだ。そこには「ビーハイブ・ハッチ」という、まさに蜂の巣の形をした修業のための石の庵が六基ある。それは石の茶室と言ってよい。人が一人やっと入れる小さな空間である。ケルト美術の権威である鶴岡真弓によれば、「この小さな部屋には大宇宙がある。ミクロの中にマクロがある」ことを修行僧たちは確信していた。それは茶の湯の心と通じ合うものである。茶室と石室は、日本人とケルト人に共通の精神を顕現したものである。六世紀、このスケリグ・ヴィヒールに聖フェナンが修道院を造り、その後、何度もヴァイキングの襲撃に耐えながらも十三世紀までケルト修道院の独自性を保ってきた。「スケリグ」とは、ゲール語で「岩」、「ヴィヒール」はマイケル（ミカエル）を指す。ここは大天使ミカエルを祀る聖なる島であった。

千利休は、「小さき植物の中に物の本質を見る」ことを実践して見せた。例えば、茶道における茶の花は椿を一枝花瓶に入れるだけで十分だとした。アイルランドに五世紀はじめてキリスト教を伝えた聖パトリックは、小さなシャムロック（三つ葉のクロー

バー) を持って大きな「三位一体」を説いた。日本人の文化の根底には「縮小礼賛」の精神がある。俳句、箱庭、茶室など、小さくすることによって素晴らしい効果を挙げる。「ミクロの中にマクロがある」ことを証する。

ケルトの末裔小泉八雲は、「日本の庭」の中で、日本の生け花の師匠が「わずか一枝生けただけの花の枝の何ともいえない美しさ」に感嘆している (I have come to understand the unspeakable loveliness of a solitary spray of blossoms……)。<sup>11</sup>

さらに、八雲は、同じ「日本の庭」の中で、「箱庭」と同類の「小庭」(こにわ)、「床庭」(とこにわ)を紹介し、称賛している。

The toko-niwa is usually made in some curious bowl, or shallow carved box, or quaintly shaped vessel impossible to describe by any English word. Therein are created, minuscule hills with minuscule houses upon them, and microscopic ponds and rivulets spanned by tiny humped bridges; and queer wee plants do duty for trees, and curiously formed pebbles stand for rocks, and there are tiny tôrô, perhaps a tiny torii as well,—in short, a charming and living model of a Japanese landscape.<sup>12</sup>

(この「コニワ」は、ふつう珍しい鉢とか、くりぬいた浅い木の箱だとか、あるいは英語ではちょっと形容のできない、変った形の器などのなかにつくられる。そのなかに、小さな小文字のような山をこしらえ、山の上には、小さな小文字のような家を置き、虫めがねで見るような池や小川に、かわいらしい反り橋をかけたたりする。小さな珍木が森や木立の役をつとめ、形の珍しい小石が岩のかわりに据えられ、かわいらしい灯籠に、かわいらしい鳥居。一要するに、日本の山水の景の、生きた美しい雛型である。)<sup>13</sup>

#### 4.5 ケルトと出雲を繋いだ八雲が見た夢 ～ 渦巻が伝えるもの

八雲は、明治24年(1891年)8月、お盆の時期、妻セツを伴って日本海に沿って新婚旅行をした。14日に松江を出て、今の鳥取県に入り、現在の琴浦の近郷では、下市、赤碕、八橋(やばせ)、由良などを巡りながら東進し、浜村の温泉宿に泊まった後、海路で美保関に渡り、29日頃松江に帰った。その時の様子は、『日本瞥見記』第21章「日本海に沿うて」(By the Japanese Sea)に詳しい。浜村の宿に投宿した八雲は、昼間宿の女中からこの地方にまつわる不思議な話を二つ聞く。一つは、孤児兄

弟の話で、ある安宿屋のあるじが古手屋から買い求めた客用の上布団が声を発する。「兄（あに）さん、寒かろう？」「おまえ、寒かろう？」と。やがてその布団が八歳と六歳の孤児兄弟のものであったということが判明する。二人は食いつないでいくため、家財道具を売り払い、最後に残った一枚の布団と一緒にくるまって冬の寒さをしのいでいたが、鬼のような大家に借家を追い出され、その布団も奪われてしまい、やがて凍死する。もう一つの話は、出雲の持田の浦の話で、ひとりの百姓が、貧しいがゆえに子を育てることを恐れ、生まれた六人の子供を次々と川へ捨ててきたが、そのうち少し裕福になって、七人目の子供は育てることにする。ある月夜の晩、生後五ヶ月になったその子が父親に抱かれたまま大人のような言葉を吐く。「父っつあん！わしをしまいに捨てた時も今夜のような月夜だったな！」その子は以後言葉らしいものは喋らず、百姓は髪を剃って坊主になった。その日の夜更け、八雲は奇妙な夢を見る。「アイルランドの諺に、夢を見たものは、目が覚めてからその夢を思い出そうとして頭さえかかれば、どんな夢でもかならず思い出すことができる」という書き出しではじまるこの箇所が続いて、夢というものはみなはかなく消えてしまうものだが、めったにない経験をしたために異常な感銘を受けているような時に見る夢（よく旅先などで見る）は、まるで現実にあった出来事のように鮮明に脳裏に焼き付けられてはっきり記憶に残る、と書き、次に夢の描写をしている。昼間聞いた二つの話から「異常な感銘」を受け、それが後で見える夢につながったと告白しているわけである。宿屋の女中から聞いた二つの話は、八雲に自分の実体験を思い起こさせたことであろう。八雲が四歳のとき、出身地ギリシャから夫の国アイルランドの首都ダブリンに来ていた生母が、環境との折り合いが悪くなり、おなかに第二子（八雲の弟）を宿したままギリシャに帰ってしまう。以後八雲は母とも弟とも会うことはなかった。そして、父は、母が勝手に帰国したという口実で離婚手続きをし、幼馴染の女性と結婚するが、イギリスの軍医としてインドに赴任後客死する。こういうわけで、八雲は両親から見放された孤児同然として少年時代を過ごすわけである。

八雲の見た夢はこうである。寺の境内の敷石の上にどこかで会った見覚えのある黒髪の女が座り込んでいる。「そうだ、出雲の女だ」、とっていると、女が目を閉じたまま唇を動かし、何かの歌を口ずさんでいる。その時、八雲に、遠い世から聞こえてくるもの悲しいケルトの子守唄の記憶がぼんやり浮かんでくる。と、その女が解いた黒髪がばさりと石の上に落ち、とぐろを巻きながら、いつのまにかその黒髪が薄い青色のさざ波となってうねってゆく。ふとわれに帰ると女は消え、日本海の青い海原が空の果てまで続いていた。目を覚ました時、真っ暗な闇の中に、海の潮騒の音を、「仏

海」(ほとけうみ)のごうごうたるしわがれ声を、魂送りの汐の声を聞いていた。<sup>14</sup>

八雲の直系のひ孫小泉 凡は、この夢の描写について次のように述べている。「最後に仏海が出てきましたが、まさにお盆の晩。日本の民間信仰や年中行事が凝縮してあられる期間で、八雲の好奇心を刺激します。とくに盆踊り好きの八雲は、当然旅行もこの時期を選んだのでしょう。8月15日は、お盆の送り火の日、精霊舟を見たり、お墓を散策したり、民家の盆棚の飾り物などを見せてもらった後に見た夢だったので。驚くのは出雲の女とケルトの子守唄が重なり、髪の毛が渦巻く — 実はここで出雲とケルトが初めて、ハーンが多分、これは深層心理の中で交錯して、髪の毛の渦は、鶴岡教授も指摘したようにケルトの渦巻き模様の象徴と同じではないか、と思われれます。渦巻きにはケルト人の死生観、輪廻転生、人間は生まれ変わり死に変わる。どこが始まりでどこが終わりかはっきりしないそういうケルトの渦巻き — そういうものが八雲の頭の中に交差してぱっと出てきたのではないか、そういう夢だったと思いたいのです」。<sup>15</sup>

八雲が投宿した温泉宿(現在は「浜村温泉館」)の前方に石碑が立ち、その前に横たわる大石に、あのニューグレンジ入口の大石に刻まれているのと同様な渦巻きが彫られており、この渦巻き模様についての説明が隣の「八雲文学碑」の最後のほうに次のように記されている。「石碑の前の石に刻まれた渦巻き模様は、ハーンが幼少時を過ごしたアイルランドに古代から伝わるケルトの渦巻き模様を模したもので、ハーンの見た夢の中に、ケルトの子守唄と共に現われる渦を巻く女の黒髪は、代表的なケルト模様のパターンである渦巻きが、遠い記憶の中から甦り、重なり合ったものと考えられている」。

## 5. おわりに

ケルトの子守唄を口ずさむ出雲の黒髪の幽霊女。はじめてケルトと日本の出雲が八雲の心の中で一つとなった夢である。八雲のそばには、幼児から最晩年まで黒髪でお話し上手な女が居た。生母であるローザ・カシマチは黒髪で、ギリシャ語とイタリア語でお話をしてくれた。彼女は字が読めなかった。アイルランドでケルトの昔話や子守唄で寝かしつけてくれたアイルランド西部コノハト出身のキャサリン・コストロシかり、アメリカで八雲の悲しい身の上話を聞いてくれて、民話を語ってくれた混血女性マティ・フォリーしかり、フランス領西インド諸島マルティニーク島にあって、クレオール料理に腕をふるい、土地にまつわる古い民話を語ってくれた女中のシリリア

しかり、そして、最後は、八雲の伴侶となって、日本の原話を語って『怪談』創作の原動力となった小泉セツの登場である。ただし、セツは日本の古い話を読めたということであるが、八雲は「読んではいけない。自分のものにして私に語り聞かせなさい」とセツに命じたといわれる。八雲は上記の夢の中で、黒髪の幽霊女が「遠い年月の隔たりを通して聞こえてくるようなかすかな声で」(in a voice that seemed to come thin through distance of years)「嘆きの歌」(a wailing chant)を歌い始め、それにより、「ケルトの子守唄」の記憶が甦ったと書いている。この女は、幼き日に分かれた生母の面影を宿す女たちの姿を一身に表わしているだけでなく、遠い過去からの長い年月にわたって愛する子供と生き別れ、あるいは死に別れてきた死んだ母たちの嘆きの声を一身に吸い込んでそれを外に出しているのであろう。ここには、幼時における母との離別という八雲の個人的体験が影を落としているだけでなく、昔から「語り」や「歌」という、文字と違って、声に出してしまえば消えてしまう「かそけき」手段を通して、深い悲しみの敗北物語を伝えてきた「かそけき」文化の伝達者であるケルト族と出雲族に対する八雲の深い共感が隠されているように思われる。

八雲が来日した明治23年(1890年)は、まさに日本が西洋に追いつき追い越せとばかりに近代化に向かって走り始めた時期であった。それを目の当たりにして、八雲は、古き良き日本の面影を残す出雲、山陰地方に自己の先祖ケルトの面影を重ね、その「かそけき」文化の消滅への挽歌を文字にした。明治26年(1893年)10月11日、友人バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain)に書き送った次の手紙(一部)は、八雲の挽歌そのものであろう。

…What made the aspirational in life? Ghosts. Some were called gods, some demons, some angels; they changed the world for man — they gave him courage and purpose and the awe of Nature that slowly changed into love; they filled all things with a sense and motion of invisible life; they made both terror and beauty.

There are no ghosts, no angels and demons and gods: all are dead. The world of electricity, steam, mathematics, is blank and cold and void.<sup>16</sup>

(……何が人生に希望を抱かせてくれたのでしょうか。幽霊です。その一部は神とも呼ばれ、また悪魔、天使とも呼ばれていました。彼らこそが人のためにこの世の有様を変えてくれたのです。彼らこそが人に勇気と目的を与えていたのです。自然への畏敬を教え、それはやがて愛に変わった。彼らこそが見えざる万物を生命の感覚と活動とで満たしていた。彼らこそが恐怖と美を造り上げていたのです。

もはや幽霊も天使も悪魔も神々もいません。全て死に絶えてしまいました。電気と蒸気と数字の世界は虚しく、冷たく、空っぽです。)

注

- 1 月尾嘉男&草野満代司会「地球新世紀・第二話～水と土の循環」および「地球新世紀・第三話～日本再発見」（2007年2月24日および3月3日 BS-TBS 放送）
- 2 松本侑子：「破れし者たちへの挽歌……ケルト族と出雲族へ」（村上 馨編 同人誌『座礁』より）
- 3 小林達雄「環状列石に縄文の心～北海道・鷲の木5遺跡の保存を」（2004年2月26日朝日新聞夕刊・文化欄）
- 4 安田喜憲「縄文の心取り戻そう」（2005年12月29日朝日新聞朝刊）
- 5 桃井和馬「大きなつながりの中から見すえる」（2004年8月1日「こころの友」。日本キリスト教団出版局）
- 6 『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』（筑摩書房、1986、PP. 14-15）
- 7 Lafcadio Hearn, *Glimpses of Unfamiliar Japan*, (Charles E. Tuttle Co., 1976, PP. 139-140, 145)  
小泉八雲著『日本瞥見記（上）』（恒文社、1991、PP. 194&202）
- 8 小泉 凡著『八雲の足跡を訪ねて』（八雲会、昭和62年、P. 8）
- 9 池田雅之編著『共生と循環のコスモロジー～日本・アジア・ケルトの基層文化の旅』（成文堂、2005、PP. 475-476）
- 10 『日本瞥見記（下）』（P. 10）
- 11 *Glimpses of Unfamiliar Japan* (P.345)
- 12 *Ibid.* (P. 346)
- 13 『日本瞥見記（下）』（P. 7）
- 14 同上（PP. 224-226）
- 15 小泉 凡「響きあうケルトと山陰の民俗～小泉八雲のケルト回帰をめぐって」（日本ケルト協会発行「CARA」第12号、2005年3月、P. 18）
- 16 Louis Allen & Jean Wilson ed., *Lafcadio Hearn: Japan's Great Interpreter ~ A New Anthology of His Writings: 1894~1904* (Japan Library Ltd., 1992, P.274)

参考文献

- Allen, Louis & Wilson, Jean ed. *Lafcadio Hearn: Japan's Great Interpreter ~ A New Anthology of His Writings: 1894 ~ 1904*. Japan Library Ltd., 1992.
- Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*. Charles E. Tuttle Co., 1976.
- 池田雅之編著. 『共生と循環のコスモロジー ～ 日本・アジア・ケルトの基層文化の旅』. 成文堂、2005.
- 小泉 凡. 『八雲の足跡を訪ねて』. 八雲会、昭和62年.
- 小泉 凡. 「響きあうケルトと山陰の民俗 ～ 小泉八雲のケルト回帰をめぐって」. 日本ケルト協会発行「CARA」第12号、2005年3月.
- 小泉八雲著、平井呈一訳. 『日本瞥見記（上）（下）』. 恒文社、1991.
- 小林達雄. 「環状列石に縄文の心 ～ 北海道・鷲ノ木5遺跡の保存を」. 朝日新聞夕刊・文化欄、2004年2月26日.
- 松本侑子. 「敗れし者たちへの挽歌……ケルト族と出雲族へ」. 村上 馨編、同人誌『座礁』. 2009.
- 宮沢賢治. 『新修 宮沢賢治全集 第十三巻』. 筑摩書房、1986.
- 桃井和馬. 「大きなつながりの中から見すえる」. 日本キリスト教団出版局、2004年8月1日、「こころの友」.
- 月尾嘉男&草野満代司会. 「地球新世紀・第二話 ～ 水と土の循環」 & 「地球新世紀・第三話 ～ 日本再発見」. BS-TBS放送、2007年2月24日&3月3日.
- 安田喜憲. 「縄文の心取り戻そう」. 朝日新聞朝刊、2005年12月29日.